

第36回  
消防団員意見発表文集

令和4年2月

共催 一般社団法人 東京都消防協会  
東京消防庁



## 目 次

第一方面支部代表	日本橋消防団	部長	森口 貴央	
	私が消防団活動で得られたもの			…………… 2
第二方面支部代表	矢口消防団	団員	浅見 英希	
	矢口消防団に入団して1年経過後の心境の変化			…………… 4
第三方面支部代表	渋谷消防団	団員	吉川 真珠美	
	正しい知識と技術に基づいて			
	主体的に活動する消防団員を目指して			…………… 6
第四方面支部代表	四谷消防団	団員	勝川 美咲季	
	消防団は究極のボランティア～女性だからこそできること～…			8
第五方面支部代表	豊島消防団	班長	池田 元	
	マスクの下は笑顔で			…………… 10
第十方面支部代表	板橋消防団	班長	林 裕子	
	意識を前へ 行動に			…………… 12
第六方面支部代表	千住消防団	部長	内田 眞利子	
	消防団員としての誇りと喜び「見たことのない景色」			…………… 14
第七方面支部代表	小岩消防団	団員	川合 快弥	
	僕ら第七世代消防団員			…………… 16
北多摩支部代表	国立市消防団	班長	小林 和紀	
	今、ここで、自分が			…………… 18
西多摩支部代表	羽村市消防団	分団長	野崎 和也	
	0から1への繋がり			…………… 20
南多摩支部代表	稲城市消防団	団員	平良 啓太	
	消防団と大切な仲間			…………… 22
島しょ支部代表	三宅村消防団	部長	平野 剛	
	離島の消防団員として			…………… 24

# 私が消防団活動で得られたもの

## 第一方面支部代表

日本橋消防団 部長 森口 貴央

こんにちは、私は消防団員です！本日は多くの消防団員の方がお集りの中、冒頭にて当たり前のことを申し上げて、大変失礼致しました。しかし私は「消防団員である」ということに、最も誇りをもっております。本日はこの場をお借りして、私はなぜ消防団員であるということに誇りを持つことができるようになったのかを、お話させて頂きたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

私の育った家族は、町内会の活動などを、積極的に行っています。私は父の勧めで消防団に入団しました。父は、私が結婚する時に「男の3惚れ」という言葉を授けてくれました。それは男たるもの3つの物を愛さなければいけない、という言葉です。その3つとはまず「家族を愛し」そして「仕事を愛し」そして「地域社会を愛せよ」という言葉です。消防団活動とは、この「地域社会を愛す」という事を思う存分にできる活動だと思っています。

私が消防団に入団して最初に参加した活動は、操法大会への訓練でした。操法大会の動作は独特なものが多く、覚えるのに当初は戸惑いました。しかし先輩団員から一つ一つの動作の意義を教えていただくと、大変興味深く覚える事が出来ました。また分団一丸となって良い結果を目指すことに、大変やりがいを感じました。私は現在では新入団員の方に、操法大会の訓練を、指導させて頂く事があります。その際は自分が先輩団員から教えて頂いた、操法の意義と、やりがいを伝える事を、最も大切にしています。

そして私は東京都消防操法大会へ出場する機会を頂きました。東京都消防操法大会への訓練では、長い期間、多くの消防団員や、訓練を行う地域の住民の皆様のご協力を頂いて、訓練が行えます。そうした多大なご協力を頂いて、ようやく出場する本番で、失敗したらどうしよう、と私はプレッシャーを感じました。しかし訓練で得られた経験は大変貴重なものです。この貴重な経験を、皆様のおかげで得られたことに大変感謝しています。本番では、地域の皆様に、自分たちの地域の消防団の活躍する姿を見てもらい、恩返ししたい、との思いでプレッシャーを乗り越えて、操法を行う事が出来ました。そして優勝1回、準優勝2回という名誉に預かることができました。この経験によって私は、本業でプレッシャーがかかるような場面でも、自分がお世話になった皆様に恩返しをしたい、という思いで、乗り越えることができるようになりました。

そして私が消防団に入団して3年たった頃に、東日本大震災が起きました。東京の都市部にある私たちの分団では、帰宅困難者の方のため道案内や、避難所の案内などをする活動を行いました。しかし現実には、不安におびえる皆様に満足に対応することができませんでした。「地域を愛す消防団員」と偉そうに志したものの、現実には自分の力不足さを痛感しました。私はこの経験を通じて、普段から資機材の習熟に努めること、地域の防災拠点の熟知に努めること、などの重要性を認識いたしました。

後日、甚大な被害を被った、宮城県東松島市野蒜地区に研修で訪れました。そこで、消防団員の方に震災時に実際にどのような活動を行ったのかなどのお話を伺いました。そのお話は、ご自身やご自身のご家族も被災されている中で、懸命に地域のために救助活動を行ったという、言葉では言い表せない様な、痛烈なご経験でした。お話を伺って、消防団員としての志の高さに感銘致しました。しかしまた、大混乱の中で、何ができるか分からなくても、愛する地域のために懸命に活動する、という思いは、自分たちの分団と同じであると共感いたしました。

私は消防団員活動で得られた、これらの多くの経験と誇りを、より多くの人と共有したい、と思っております。そのためにはより多くの人に、消防団員になっていただきたいと思っております。私は新たな仲間を、消防団員に勧誘する際には、必ずこのように申し上げます。「こんにちは、私は消防団員です！私は消防団活動で多くの有意義な経験と、自分への誇りを得ることができました。あなたもいかがですか？」

以上です、本日はご清聴頂き、誠にありがとうございました。

# 矢口消防団に入団して1年経過後の心境の変化

## 第二方面支部代表

矢口消防団 団員 浅見 英希

矢口消防団に入団してから1年が経過しました。1年間、消防団員として活動して1番感じたことは、消防署職員、消防団員、そして、地域住民との一体感です。

日々の訓練、地域の行事、市民消火隊指導等、活動を通して住民みんなで地域を守ることを実感しました。消防団員として、身が引き締まる思いです。

消防団に入団したきっかけですが、消防団員のかたから街頭にてポケットティッシュをいただいたことにより消防団員の募集をしていることを知りました。

一般企業の会社員をしていることもあり、入団しても活動に参加できるか不安でした。

矢口消防署の近所に住んでいることもあり、入団の相談をしたところ、第6分団を紹介して頂きました。職員の方には感謝しております。第6分団に入団したからこそ1年間続けることができました。貴重な経験の場を用意して頂き、この場を借りてお礼申し上げます。

矢口に住んで20年近くたちますが、自宅と職場の往復の日々で、どのような地域活動があるのか分からないのが現状でした。しかし、1年前に消防団に入団し地域活動に参加することにより、住民との会話、ふれあいを続けるなかで、人情に触れ、地域の一員になれた感じがしました。

消防団活動においては、町会、自治会の防災訓練で、参加者全員が真剣に取り組んでおり、消防団員として期待を上回れるよう、日々の訓練に取り組む意識が変わりました。

年末消防特別警戒では、住民と一緒に徒歩で警戒にあたり初めて拍子木を打ち、今でも感触が忘れられません。地域の活動に参加することにより、防災への意識が高まりました。消防団員としての活動を通して、人としても成長できました。

町会・自治会の餅つき大会では、実家での餅つきの経験がありましたが、大量につくことはなく、貴重な体験をしました。自治会からつきたての餅を頂き、コシのある餅を食べているときに、まるで第二の故郷のように感じました。

火災・水害にて出動する際、恐怖心は常にあります。しかし、日ごろから一緒に訓練している矢口消防団員、矢口消防署職員の支えてくれる安心感があるからこそ、勇気を持って活動することができます。皆様へ感謝しております。

訓練に参加することにより、日常の意識も変わってきました。何気なく歩いていた道路に対して、消火栓の位置を確認したり、駅や公共施設にいる時には、AEDの所在を確認したりと、見る視点が変わってきました。災害が発生したときに、すぐに場所へ駆けつけることができるよう、住所を調べたりと地図を見ることが日課になりました。

日々の訓練は、防災はもちろんのこと、会社員として仕事でも活かせることを感じました。訓練のときの緊張感、状況判断等の積み重ねにより、実際の現場では平常心を保てると思います。場面は変わっても、全体を見渡す力は職場でも活用することができます。

また、消防団に入団してから良いことも起こりました。

体力をつけるため、自転車で遠くまで出かけたり、1駅だけでなく、2、3駅歩くことを続けていたら、健康診断の結果が改善されました。意識の改革だけでなく、身体の改善も行うことができ、有意義な1年が経過しました。

日常生活では経験できない貴重な体験をさせていただいており、矢口消防団、矢口消防署の皆様へは感謝しております。地域を守るやりがいのある活動で、入団後、充実した日々を送ることができています。

最後に、このような場を与えていただき、大変感謝しております。

矢口消防団に入団できたこと、矢口消防署の皆様と一緒に活動できることは、自分自身の誇りとなり、励みになります。今後も、皆様の力になれるよう尽力しますので、ご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願いいたします。

ありがとうございました。

# 正しい知識と技術に基づいて

## 主体的に活動する消防団員を目指して

### 第三方面支部代表

渋谷消防団 団員 吉川 真珠美

消防団に所属する前、応急手当の大切さを実感する身近な出来事がありました。私の祖母は大好きのお寿司を自宅で食べている最中に、喉に食事を詰まらせて亡くなってしまいました。長年、認知症やこころの病気などに悩まされた祖母を、このような形で突然亡くすことを、私たち家族は想像もしていませんでした。その時、一人でどうすることもできず、目の前で最愛の妻を失った祖父の気持ちを想像するだけでも、胸が苦しくなります。

数年後、私は地元のサークルで知り合った先輩に誘われて、第4分団に入団しました。当時、消防団の役割は「災害時の活動」というイメージが強かったのですが、地域とのつながりが全くなかった私は、「地元の人と知り合える良い機会かもしれない」という軽い気持ちで入団届けを出しました。

入団後、日々の活動を通じて、消防団が平常時に幅広い活動を行なっていることを知りました。とくに、同じ分団で応急手当指導員として地域で活躍し、地元住民にも頼りにされている先輩消防団員のかっこいい姿を目の当たりにし、自分もいつかそのようになりたい。祖母のように苦しむ人を助けられるようになりたい、と思うようになりました。

救命講習を受けてから数年後の一昨年、私はとある出来事のバイスタンダーになりました。ある平日の朝、駅からバスに乗って取引先に向かっている最中のこと。少し混雑した車内の奥でつり革に捕まっていたところ、隣に立っていた若い女性が、突然、床へ崩れ落ちてしまいました。とっきの出来事に戸惑いながらも、救命講習のおかげで、知らず知らずのうちに「わかりますか？」と肩を叩きながら意識の確認をすることができました。幸いにも、女性には反応もあり、大事には至らなかったようです。

しかし、その後、私は不十分な知識によって誤った行動をとってしまっていたことに気づきました。不自然な体勢になっていた女性のためと思い、本人にとって楽な姿勢であるかなどに関わらず、回復体位をとらせようとしてしまったのです。その趣旨がうまく伝わらず、別のバイスタンダーが他の乗客の邪魔にならないようにと気を効かせてくださり、私たちは女性を起き上がらせ、座らせてしまったのです。良かれと思って実施したことでしたが、よくよく振り返ると、不用意な移動などやってはいけないことでした。



この経験を通じて、消防団員として大切なことは、正しい知識とそれを的確に実践できる技術を基に、状況に応じて主体的に対応することだと改めて実感しました。特にこの出来事で間違った知識や技術をもとに取り組んでしまう危険性とその怖さを反省しました。正しい知識や規律を備えつつ、それらを実際に活かせるように、日頃の学びと訓練が大切だとつくづく思いました。

また、受け身ではなく自ら考えて動ける主体性のある団員になりたいと決心しました。それはいざという時に限らず、平常時から消防団の活動を豊かにするために、分団が抱える課題やその解決に向けた取組などを建設的に考え、自分には何ができるか？を問題意識を持って問い続けることも大切だと思いました。

正しい知識の獲得や主体性の醸成には、一人一人の努力や取組が重要ですが、それを育むためには、一消防団員としてできることも多々あると思います。例えば、普段は関わりのない地域の多様な団員が経験を共有する場づくりや、これからのニーズに応じた消防団活動のあり方や具体的な取組について団員同士で議論する機会など、小さくても、少しずつ始め積重ねていくことがあるのではないかと考えます。

これからも、迅速的確な応急手当の大切さを気付かせてくれた祖父母の印象的な出来事やバイスタンダーとしての反省点を忘れずに、いざという時に正しい知識と技術で、救いの手を差し伸べ、地域や身近な大切な人を守る消防団員を目指し日々努力していきたいと強く思います。

# 消防団は究極のボランティア

## ～女性だからこそできること～

### 第四方面支部代表

四谷消防団 団員 勝川 美咲季

「おとーさーん、がんばってええー！！」

当時四歳の私は四谷消防団の操法大会で、2番員として走る父の姿を追いかけ、応援席で全力疾走しながら大きな声で叫んでいました。これが私の消防団に関する、一番古い記憶です。それから15年、19歳になった私が消防団の活動服を着て整列しているなんて、だれが想像できたことでしょう。

私にとっての消防団は、幼いころから家族の夕食の話題に登場するくらい身近な存在でした。日々の訓練の話、操法大会のこと、様々な災害現場での経験。色々なことを父から聞いて育ちました。

「四谷の町は路地や階段が多いだろ。もし火事になって、消防車が走れないようなところは、お父さんみたいな消防団が可搬ポンプをもって近くに行って火を消すこともあるんだよ」

自宅の近くを一緒に散歩しながら、父が教えてくれました。その時、自分たちの町は自分たちで守るという言葉の意味を実感したのが強く印象に残っています。

大学生になり、就職活動を経験し、生まれ育った町で働き生活し、私をここまで育ててくれた町や人たちに恩返しができないかという思いを持つようになりました。そんな時、父のかけてくれた「住む町や人々に精通し、自分たちで自分の町を守る消防団は究極のボランティアのようなものだよ」という言葉を受け、入団を決意しました。

入団前は、年配の男性を中心とする消防団員の中で、自分のような女性の大学生が何の役に立てるのだろうか、力仕事もできずかえって足を引っ張ってしまうのではないかと、悩みや迷いがたくさんありました。しかし、いざ入団してみると、分団長が女性で親身に指導をしてくださり、とても心強かったことを強く記憶しています。また、消防団活動を通じ、私たち女性団員には、力仕事は向いていないが女性だからこそ気付くこと、できること、女性でなければ気付かなかったこと、女性でなければできないことがあり、今、何が必要で、私は何をすべきなのか。それを見極めて活動することが大切なのだと気づくことができました。

日本列島に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から11年が経とうとしています。この間にも、2016年の熊本地震、2019年の房総半島豪雨など、多くの方が避難を余儀なくされる災害が発生しています。

ひとたび大きな災害が起きれば、体育館などの避難所に性別年齢関係なく身を寄せ合い、雑魚寝し、エアコンもなく、トイレも仮設のものを共同使用している報道映像を、皆さんも目にしたことがあると思います。

私は被災経験がありませんが、このような映像を見るたび被災された方が不安に包まれ厳しい環境で避難生活を送っていることを知りました。

もし東京が被災したら、私は女性消防団員として何をすべきか考えます。

当然、消防団員として災害活動は再優先事項ですが、一方で女性団員として女性の目線で避難所生活を送っている方々の不安を和らげることできると思います。

私は地域を守る消防団員として、首都直下地震などに直面したとき、自分たちの町と人を守るために、力の限り消火活動や救助活動を行います。大きな災害が収束しても、家や財産を失うという大きな困難に直面している地域の人たちは大勢います。そんな時、町の方が身を寄せ合う避難所に、「消防団」とロゴの入った活動服で巡回し、困っている人たちに声をけるだけで安心感を与えることができるかもしれません。女性団員として、女性特有の悩みや不安を感じる人に安心感を与えることができるかもしれません。

私が女性であるからこそ、災害の現場でも、避難所でも、気付くことや、災害により日常生活が脅かされた地域の人たちのためにできることがあります。

私にできることを、私にしかできないことを。これからも多くの人と町に恩返しをするために、女性団員として究極のボランティアを続けていきたいと考えています。

# マスクの下は笑顔で

## 第五方面支部代表

豊島消防団 班長 池田 元

私が消防団に誘われたのは、町会の餅つき大会でのことでした。

「引っ越してきたばかりで忙しいだろうけど、地域を守るのは住民の責任だよ。もちろん自分の仕事があるときは、無理して出なくていいんだ」

勧めてくれた人はそう言いました。しかし、それまで消防団の存在は知っていても、まったく関心がなかった私は戸惑いを隠せず、その場では即答できませんでした。いろいろ迷った末に入団したのは誘われてから1年半後、2006年の夏で、私が満43歳の時のことでした。

こんな歳になってからの入団ですから、花形的な役割は一度もやったことがありません。現場に出ても高い所に上ったことはありません。倒れた人を担いで助けたことはありません。ポンプ操法大会の選手にも1度もなれませんでした。それでも入団してから15年以上の歳月が経って、火災や洪水の現場ではホース巻きや土のう積みがだいぶうまくなりました。地震のときには分団庫に集まる前に、一人暮らしのお年寄りに声をかけてから行くようになりました。ポンプ操法の練習のときは準備と片付けの手伝いがあります。できるだけ一番に来て最後に帰ることを心掛け、頼られるようになりました。

私は何より消防団の仲間と一緒にいるときの連帯感が好きです。

また娘や息子が通っていた小学校、中学校に、積極的に防災訓練や救急救命訓練を手伝いに行き、自然なかたちで子供たちに激励の声かけができるようになりました。それまではよその家の子どもに対して挨拶ひとつできない消極的な人間でした。しかし消防団の活動服を着ていると、自分自身がこの町の守り手なんだという自覚と勇気が湧いてきます。この町に住んでいる子は、みんな自分の子どもと同じだという気持ちになれるのです。

地元の小学校とPTAの依頼を受けて、児童たちと一緒に校区内に設置された消火器と消火栓の写真を撮影して歩き、小学生用の防災マップを作ったことは良い思い出になりました。また、各町会の防災訓練に参加したことで、自分の家の近所だけではなく、駒込じゅうの町会役員や住民の方々と顔見知りになれたことも、消防団員になってからの素晴らしい体験です。

特に内心うれしかったのは、訓練を受けて、応急手当普及員の認定をいただいたことです。もう昔の自分とは違います。目の前で倒れた人がいても、何をどうすれば良いか適切に処置する自信ができました。

私が住んでいる豊島区駒込は、広い地域が木造住宅密集地域にあたります。

補助 81 号線の整備によって住民の生命と都市機能を守る動きが進んではいませんが、実際に災害が起きたとき、地元の防災の担い手は、やはり我々消防団員だと思っています。

ところが新型コロナの流行でこの 2 年間というもの、ポンプ操法大会や合同点検は中止となり、学校や町会の防災訓練や、救急救命講習も中止になったり時間を短縮されたりしました。私は去年の夏、東京オリンピックの会場警備のため海の森水上競技場に行きました。しかしこれも無観客で開催されたため、ほとんどお役に立てなかったのではと思っています。

先日ひさびさに地元の中学校に呼ばれました。短い時間で生徒の皆さんに救急救命講習をすることになったのですが、お互いにマスク越しでは、こちらが話したことをわかってもらえているのか不安だったので、最初に「今はみんなマスク越しのコミュニケーションになっていますから、すみませんが、こちらが言ったことがわかったら“ハイ！”と返事をして、いちいちうなずいてください」とお願いして、反応を確認しながら進めていきました。

コロナは本当にやっかいです。

コロナの流行中も時はどんどん過ぎていきます。私もとうとう今年で還暦になりました。だれか若い人を消防団に誘わなきゃな、常々そう思っていたのですが、高校を卒業してすぐに大手企業の工場に就職した息子が二十歳になり、なかなか良い体つきに成長したのを見て、思い切って誘ってみました。

ちょうどその時、テレビドラマで大地震が起きて消防署員や消防団員が活躍する場面を見ていた息子が「消防団って正義の味方じゃん」と言ってくれたので、すんなりと入団願いを出してもらうことができました。そして幸い昨年末に入団を許可していただき、今年から親子で消防団員です。

新型コロナの流行は終息していませんが、消防団員の任務は変わっていません。私はマスクの下は常に笑顔で、地域の皆さんのお役に立てる活動を心がけ、新入団員の息子の手本になりたいと思っています。

以上

## 意識を前へ 行動に

### 第十方面支部代表

板橋消防団 班長 林 裕子

「何のために、消防団の活動をしているのか。」、皆さんだったら、この問いにどう答えますか。

答えはもちろん一つではありません。皆さんがいま、頭に少しでも浮かんだ事、それが皆さんの一人ひとりの答えです。私は、正直に申し上げますと、今まで深く考えず、目の前の消防団の活動を頑張って取り組むのみでした。しかし、新型コロナウイルスの流行が消防団の活動にも影響を及ぼし、活動回数は例年よりも格段に減りました。活動の回数やコミュニケーションの場が減ると、自分自身のモチベーションも低下してしまうのではないかと心配になっていましたが、その事が「何のために私は消防団に属し、活動しているのだろう。」と改めて考えるきっかけとなりました。

私が初めて消防団を知ったのは大学生の時です。たまたま駅前では消防団入団促進のキャンペーンをやっており、もらったチラシには「地域のために」や「防災のために」などの文言がありました。それまでは消防団の存在を実は一切知らず、逆に何も知らないからこそ、「私にも何かできるかな」と思い、思い切って入団しました。入団後は、消火活動のこと、応急手当指導のこと、災害時の活動のことなど、ほとんど初めて知ること、経験することばかりでした。

その中でも、よく覚えている出来事は深夜のマンション火災での支援活動です。一室が燃え、怪我人はおりませんでした。消火後で建物の電気が消えている中、外に避難していた上階に住むご高齢の方を部屋まで案内することになりました。足元は暗い上に濡れて歩きづらく、その方はとても不安そうでした。私は少しでも安心して安全に登って欲しいと、手を引きながら声を掛け、ゆっくりと登って行きました。部屋に着いた時、その方は安堵の表情を浮かべ、「一緒に登ってくれてありがとうね。」と言われました。その時、微力ながらも役に立てた事が嬉しく、「力だけじゃない、ほんの少しの気遣いでも地域の役に立てる。」と実感でき、消防団をやっていて良かったなと思いました。

その他にも、防災訓練や講習会で試行錯誤しながらの応急手当指導、多くの人の支えを強く感じた操法大会、地域との繋がりや同じ団の家族のような仲間、消防団の活動を通じて得たものは想像以上のものでした。

このような活動や経験を振り返り、原点に立ち戻って考えると、消防団の活動で関わってきた様々な人たちの顔が浮かんできます。それは、地域の人、消防団・消防署の人、支えてくれる家族。もし大きな災害が起こった場合、行政

だけで全ての災害に対応しきることは難しいと言われています。そのような事態に陥った時、一人でも多くの人の手助けになれるよう活動をしたい、そして、私一人の力だけでは難しいことも地域のことを知っている消防団という組織、仲間がいることで大きな力を発揮する事ができます。消防団員は一人ひとりに仕事や家庭、様々な背景があり、お互いに理解し合わなければ組織としての活動は難しいと思います。しかし、地域のことをよく知っており、同じ地域に住む仲間として、「何のために活動するのか」という目的を共有すれば強い組織になります。

皆さんは何のために活動しますか？ 私は思い浮かぶ事や人たちのため、スキル向上の努力を惜しまず、そして、仲間と共に基礎訓練や想定訓練を行い、密接な連携と防災力の向上を図っていきます。今までの経験を活かし、意識を前へ、行動へ、私は消防団員として、自らの強い意志を持って活動に取り組んでいきます。

# 消防団員としての誇りと喜び「見たことのない景色」

## 第六方面支部代表

千住消防団 部長 内田 眞利子

私、生まれも育ちも千住っ子！！第6支部代表、千住消防団の内田眞利子です。

消防団員になって、早、23年目。最初の活動は、地元地域での、「消防団員募集」のチラシ配りです。この時、私も、PTAの5人を入団させました。

今から17年前、千住消防団の意見発表会があり、各分団から1名ずつ選出され、6名の方の厳正な審査により、私を、第19回の本大会に押し上げて下さいました。結果、思いもよらず、最優秀賞をいただく事ができました。その年に、富山県で開催された「全国女性消防団員活性化大会」においても、2千人の前で、元気いっぱい東京代表として、発表することもできました。(バリバリの52歳でした。)それを機に、各行事、大会の司会進行や、火災予防週間のパトロールや運動会でも、率先して広報活動をさせて頂きました。そうした活動の中で、「書く力」「活かす力」「聴く力」をたくさんつけさせて頂きました。

又、台風や震度4以上の災害活動にも、男女区別なく、夜中2時に帰宅したこともありました。大きな災害現場では、署員の方に放水のあとの水漏れの処理の為に、ブルーシートの張り方など、全身ビショぬれになりながら教えていただきました。

又、応急手当普及員としても、講習会は必ず参加してきました。突然の体調不良の傷病者を、今、ここにいる自分が助けるのだと、使命感を持って「手当て」することも教えて頂きました。

月初めに行う「点検」。几帳面な働き者の我が分団長の指示の元、可搬ポンプの積載車はもちろんの事、格納庫はいつもきちんと整理整頓されています。一人ひとりが、どこに何があるのか、しっかりと把握し、いつでも出場できるようにと激を飛ばしています。又、着ている活動服の点検も、厳しくチェックされます。バンド、靴紐、バッジ等々。身だしなみの大切さも教えて頂きました。

世の中がまだ、コロナの自粛に入る前の、平成31年から令和元年にまたがったの操法大会。私、ひよんな事で「指揮者」になってしまいました。夢々、「指揮者」になれるなんて思いもよりませんでした。苦しい訓練の始まりでした。でも、楽しく訓練ができたのです。若い団員諸君が、こんなオバサンを、手取り足取りいやがらずに、丁寧に教えてくれました。走る事の不安。つまずかないように必死でした。そして、声の出し方、号令のかけ方、立ち位置と足の角度、動かし方、規律のむずかしさをこの訓練で学びました。何とか、形に



なりました。若い5人の選手を引きつれて、いざ出陣！！まさにこの時、今までの人生で、一度たりとも目にした事のない光景が広がっていました。微動だにしない整列！！次に発する「指揮者」の私の声を聞きのがさんとばかりに、ジッと見すえた選手達の力強い目。一瞬、時が止まったかと、武者震いがしました。「指揮者」として、今、見ている前方は、「見たことのない景色」です。感動して声が出なくなりそうでした。分団長はじめ、5分団のみなさんに感謝です。「指揮者」として、指揮をとらせて頂き、本当にありがとうございます。ちなみに、この時の操法大会は、各分団毎、女性の団員が組まれておりました。今までにないすばらしい活躍と人数でした。若くてステキな女性団員達なのです。女性の分団長が誕生するのも、夢ではないと確信しております。（おっと、どっこい、男性団員、うかうかしてられませんぞ！！）

今まで、消防団員として頑張ってきたのも、「主人と3人の息子達の理解と協力があったればこそ」と、家族に感謝です。これからも、人の為に、地域の為に、消防団員として動ける人生に、私は誇りを持っております。そして、喜びを感じております。

ご清聴、大変に、ありがとうございました。以上。

# 僕ら第七世代消防団員

## 第七方面支部代表

小岩消防団 団員 川合 快弥

「今、僕は、はっきり宣言します。消防団に入団してよかった」  
私は二年前、18歳になったと同時に消防団に入団しました。

私が所属する小岩消防団第五分団はアットホームな雰囲気、先輩方は優しく時には厳しく、居心地がよく、地域の方々も優しい方ばかりです。私が消防団に入団した決め手は、母の誘いです。若い人が少なく、「良かったら入団してみないか」と誘われました。当時、私の中では人生の経験としていいなと思い入団しました。しかし現在は、多くの活動を通し、地域の安全、安心のために活動をしています。考えを変えてくれたのは、地域の方々の声でした。地域の方々は、「いつも、ありがとう。」と感謝してくれます。感謝の言葉をここ数年、掛けられたことがなく、とても新鮮な気持ちになりました。消防団が地域に愛され、頼りにされている姿を見て、私の考えは変わりました。ある日、町会長から若い消防団員が少ないと話を伺いました。確かに私の次に若い団員は、30代で若い団員は多くないと気付きました。私は若い団員を探すため、幼なじみを消防団に誘いました。幼なじみは地元愛が強く、人のため、地域のため入団を決意してくれました。

幼なじみの入団は、本当にうれしかったです。ですが、一つ気になる質問をされました。「消防団って、何？」という質問でした。確かに私も、消防団とは何かと分からずに母に同じ質問をしていました。そこで私は、「消防団とは何か？」と知らない人が多いと気づき、消防団員を増やすには、より多くの方に消防団を知ってもらうことが必要であると思います。そこで、SNSを利用しようと考えました。

まず初めは、インスタグラムを活用し消防団を紹介しました。多くの友人に消防団という存在を知ってもらおうと行動しました。すると、数人の友人から「インスタ見たよ」と声を掛けられました。私は、若い消防団員を確保するには、消防団の姿を知ってもらうことが一番必要だと感じました。そこで、友人と現在消防団を幅広く地域の人々に知ってもらうために「僕ら第七世代消防団員として」今までの慣習に捕らわれず新たな募集活動「若い人から若い人へ」輪を広げていくためにSNSが普及している今の時代に多くの若者が消防団に興味を持ち消防団を知ってもらい、私たちは若い消防団員確保のため日々活動しています。

そして地域の方々と一緒に安全・安心なまちづくりができるために、これか

らも消防団員として活動していきます。

## 今、ここで、自分が

北多摩支部代表

国立市消防団 班長 小林 和紀

私が消防団に入団したのは、平成24年4月。東日本大震災の翌年になります。震災当日、高校で教員をしている私は、激しい揺れに古い校舎を飛び出したことを覚えています。

二日後、新聞記者の友人から電話がありました。「今、釜石にいる。子供たちは助かったが、大人は自分のことで精一杯で、子供たちに全然手が回らないので、本を持ってきてくれ！」と言われました。私は、図書室の本を沢山詰め込んで釜石に向かいました。夜行バスを乗り継ぎ、市内5つの小中高校に本を配り歩きました。

海沿いでは、ぐちゃぐちゃに潰れたポンプ車が、橋の欄干につき刺さっていました。

団員はどんな思いで、最後までハンドルを握ったのか。人々に叫んだのか、胸が締め付けられる思いでした。避難所では、今何が必要か聞いて回り、行政につなげました。

また、釜石高校体育館では、トイレ掃除や灯油の継ぎ足しを率先して行う中高生、校庭で元気に遊ぶ小学生、皆にあやされ、けらけら笑う赤ちゃんに、皆が自然と笑顔になる光景に出会いました。その時、私は、自分が何度も来るよりも生徒たちを連れて来ようと決意し、それから毎年、生徒たちや家族と東北三県を訪れています。

そしてふと、今住む国立で何かできることがないかと思い、国立市消防団に入団しました。

小学校で行われた住民参加の防災訓練で、消火栓訓練や車いす補助をする私の姿を見て、3人の娘息子が立川少年消防団に入団し、歳末の夜回りや消防フェアやパレードの手伝いを、はつらつと活動してくれました。

私が所属する第一分団には、珍しい伝統があります。それは、常に器具置き場のトイレがとても綺麗なことです。そのトイレ掃除は分団の役員が欠かさず行っています。30年以上前の便座ですが、まるで新品のような輝きがあります。建物も古いですが、とても綺麗に使われています。規律や身だしなみにも、ピリッとした雰囲気があります。又、入団して驚いたことは、訓練やミーティングの時に、人の悪口が出ないところです。意見が違ふ皆の心が一つになるように、分団長が気を配られていました。私は、本当の火災現場で命を預ける仲間の絆を深めるために、ここまで心を砕くのかと、感銘を受けました。私も、点検や訓練に、仕事で疲れていても、少しでも皆の足が向くように、まかないの手料理を磨きました。

復興支援や消防団活動をする中で、「人は自分が必要とされていると感じた時、思いもよらない凄い力が出る」ことを知り感動しました。そしてその力を充分発揮するた

めには、日ごろの地道な準備、訓練が必要だと実感しています。このことは誰でも感じてはいると思いますが、実践することはなかなか難しいものです。

今、コロナ渦で様々な消防訓練、研修などが中止や延期になっており、併せて地域との繋がりがますます希薄になっています。その為、新しい生活スタイルに合わせた消防団活動が求められていると感じます。これまでの訓練ひとつひとつに「何のためにやっているのか」という意味をしっかりと噛みしめ、いざという時に、正しく力強い判断・行動ができる一人一人になればと思います。又、これまで以上に積極的に地域と連携し、新しい防災技術を身につけ、今いる場所の安心安全のケアマネジャーに、消防団員が成長することが求められているのではないかと感じております。ここまで成長させて頂いた消防団活動に感謝し、市民の皆さまに対して、先ずは「今、ここで、自分が」動き始める消防団員になってまいります。

## 0から1への繋がり

西多摩支部代表

羽村市消防団 分団長 野崎 和也

歴史は繰り返す。地震や災害も繰り返す。人の歴史は糸のように繋がっている。私たち消防団は、この先起こり得る災害に目を向け備えることも大事だが、過去に目を向けて歴史から学ぶことがあるのではないだろうか。

消防団の歴史は今から遡ること310年前、火事と喧嘩は江戸の華と言われた江戸時代、8代将軍徳川吉宗が南町奉行所の大岡越前守に命じ町人による町火消しを組織させたのが始まりである。儒学者からの進言と大岡の人情によって今まで存在しなかった町火消しを存在させたのではないかと私は思う。この自分の町は自分で守るという精神は今の私たちにも繋がっている。

さて、0の状態から1を作りだした話をしたのですが、私たちが日々使っているコンピューターも0と1で出来ています。コンピューターが扱うのは数値だけではありません。文字や画像、音声など、あらゆる情報を0と1だけで表します。技術の進歩により機械やロボットだけではなく、人が実現するさまざまな知覚や知性を人工的に再現するもの、いわゆる人工知能AIも進歩しており、AIによって未来の消防活動も変わっていくと思います。例えば、NASAはオードリーと呼ばれる人工知能を使った、消防活動支援システムを開発している。オードリーは過去の火災防御活動や検証データを人工知能に学習させ、現場で活動する者が予測困難な火災特性や化学物質、有毒ガスなどのリスク情報を空気呼吸器の面体などを用いて活動者に情報を伝えることで、活動者の生命を守り、現場活動を支援する。未来の消防団活動もAIによって大きく変わることが予想される。こうしたAIの進化が人間の仕事を無くしてしまうかもしれない。

しかし、繰り返される歴史の中、私たち消防団には過去を振り返りやらなければいけないことがある。それはAIを利用した活動ではなく、「あい」をもって活動することである。今後、災害が発生した時に想定をはるかに超えてくる可能性がある。コロナや大震災があったように。富士山の噴火や大規模同時多発火災が起こった時、必要になるのはAIではなく「あい」だ。

地域愛・助け合い・お付き合いである。自分達の町は自分達で守り、地域の特性を利用した救助をし、日頃から地域住民とかかわる。すごく当たり前のことだが、意外に忘れがちなことだったりする。歴史は糸のように繋がっているのだからこそ過去の太岡に学ぶべきだろう。そして、今後、消防団にとっての課題である後進の育成と人材の確保は、地域との繋がりが密になることで解消

できる。人の歴史は糸のように繋がっている。組織としての消防団をタテ糸に、そして地域住民との関わりをヨコ糸に紡ぎ災害から守る刺し子になってこれからも地域住民を火の粉から守る必要があると過去から学んだ。

# 消防団と大切な仲間

南多摩支部代表

稲城市消防団 団員 平良 啓太

「お前もうやめろ、代わりに俺が出る」

これは私がはじめての操法大会の練習の時に先輩に言われた言葉です。そのころ私は大学生で、大学生活とバイトと操法、今思うとかなりハードな生活だったと思います。当初操法の練習は、スポーツの延長のように楽しくやっていました。

しかし、練習が進むにつれ、より難しい動きや正確さが求められ、出来ない自分に苛立つことが多くなりました。そんな時です。片付けの際にホースを投げてしまい、それを見た先輩から言われたのが、冒頭の言葉でした。先輩の言葉は、器具愛護が出来ていないだけでなく、普段の私の振る舞いや操法への向き合い方などを見ているの発言だったのです。仲間に認めてもらいたいという気持ちで取り組んでいた活動で、自ら逆の結果を出してしまったことがとても悔しくて、その時私は泣いちゃったんですよね。

しかし、先輩はその後直ぐに、私の足りないところを埋めるように、徹底的に話しに付き合ってくれて、それが自分を見つめ直す機会をくれました。それからは練習に集中できるようになり、練習後には筒先とホースを持ち帰り、家で練習するほどに熱中しました。大会では優勝は逃したものの、大きな達成感があり、練習の姿勢も認められ、晴れて分団の仲間になれた気がしました。

その後、私は就職し、結婚しました。徹夜になるほど忙しい日もありましたが、合計4回の操法大会に選手として出場し、その後は指導員として携わりました。指導した後輩が最優秀賞を取るなど、苦勞と喜びの中で仲間意識が強くなり、気づけば消防団は私にとって居心地の良い場所となっていました。

そう感じていた矢先、私は仕事で体調を崩してしまい、休職せざるを得ませんでした。しかし消防団だけは続けており、仕事を休んでいるのに消防団に参加する私を、妻はどう思っているのだろうか？消防団をやめた方がいいのだろうか？私は悩み、分団の仲間に休職していることや今後のことを相談すると、「自分の体が1番だよ。やめても良いんじゃない？」と、私を気遣う言葉をくれました。その瞬間、「仕事はできてないけど、消防団は自分が活躍できる場所なんだ。真剣に向き合ってくれる仲間もいる。消防団をこんな形で辞めたくない！」との思いが湧き始めました。消防団での活動は、仕事で自信を失っていた私に、もう一度自信を取り戻すきっかけをくれたのです。

休職しているのに、消防団には欠かさず出かける当時の私をどう思っていたのかと、今、妻に尋ねると「なんとも思ってなかったよ」と言って、私を笑わせてくれます。呆れながらも本心では心配してくれていたと思うのですが、それを顔に出さない器の大きい彼女がいてくれたことも、私の支えになりました。



消防団で得た仲間と自信、そして家族の支え、職場の先輩のサポートもあり、1年半のつらい休職時期を乗り越え復職を果たし、自発的に仕事に臨む姿勢を評価していただき、昨年からは職場で部長という役職を頂きました。消防団活動というのは、人のためにやっていると思っていましたが私自身が助けられ成長し、実は自分のための活動であったことを痛感しました。真剣に向き合ってくれる仲間、支えてくれる家族があったから14年間消防団を続けることができました。消防団に入っていなければこの「仲間」に出会えず、復職のきっかけも掴めなかったのです。

消防団活動は決して容易ではありません。しかし、だからこそ真剣に向き合い、絆を深めることができるのです。私を「仲間」に出会わせてくれた消防団と、私を支えてくれた家族に感謝します。これからはこの消防団という場で、自分自身が誰かの「仲間」となり、ともに助け合う「仲間」、互いに成長できる「仲間」、そして地域に貢献できる「仲間」となります。

ご清聴ありがとうございました。

# 離島の消防団員として

島しょ支部代表

三宅村消防団 部長 平野 剛

皆さんは離島と聞くとどのような映像を想像しますでしょうか。砂浜に波がさざめく青い海、山に目をやれば木々が生い茂り、雄大な自然が広がっている、その様な情景が目浮かぶ方がほとんどではないでしょうか。私の故郷である三宅島もそのような離島の一つであります。三宅島は東京都から南へ約180キロメートル、黒潮の影響を受け温暖多雨な気候であり、1年を通して暖かく住みやすい自然豊かな島です。

一方でその様な素晴らしい自然環境は住民にとって、時として過酷なものとなる場合があります。ひとたび台風が接近通過となると海は大荒れとなり高波・高潮による被害が、山では大雨が長時間続くと土石流・土砂崩れなど土砂災害が発生します。その他にも強風による家屋の倒壊、長時間にわたる停電の発生など地域住民の生命と財産に甚大な被害を及ぼします。また、三宅島においては噴火による災害発生が常に懸念されております。火山の島としても知られる三宅島は有史以来、噴火災害が繰り返し発生しており過去100年間においても4回数えられます。中でも1983年と2000年に発生した噴火災害の記録が詳細に伝えられ、前者は溶岩流が約400棟もの家屋を飲み込む被害となりましたが、幸いにも人的被害は発生しませんでした。後者の噴火災害は溶岩流の噴出ではなく爆発的な噴煙と小規模な火砕流の発生・大量の火山ガス放出と過去に例を見ない火山活動を見せ、ライフライン関係者を除く全島民が島外に長期間避難するという異例の事態となりました。

2000年当時、私は高校生で噴火という災害を初めて経験しました。慣れ親しんだ雄山から遥か上空まで上がり続ける噴煙を見上げ、その迫力に恐怖し足がすくむ感覚を覚えました。なんとか自宅に帰りその後避難場所に到着した際に、知人や消防関係者がいて安心したことをよく覚えております。この噴火災害においても人的被害の発生はありませんでした。有事の際に地域防災の要である消防団が、的確に活動していることによって得られた結果だったのだと、入団後によりよく理解しました。先輩方に頭が下がる思いと同時に、改めて身が引き締まる思いを自覚しました。

現在、三宅村消防団においては他の多くの消防団と同じく、地域の人口減少による団員の担い手不足と高齢化という課題を抱えております。また三宅島においては2000年の噴火災害による全島避難の弊害として、約4年間の空白期間が存在することもネックとなっております。当時を知る先輩方が相次いで

退団する年齢となり、組織の新陳代謝が急激に促されました。その結果として噴火災害をはじめとした様々な現場を経験したことのある団員が少なくなっております。この二つの課題解決については私自身部長を拝命し組織を運営していく中で、その難しさを痛感しております。

経験不足については退団された先輩方に当時の経験談や指導を仰ぐとともに、定期的な訓練と訓練所教官による教育訓練に積極的に参加しスキルを身に着ける。日々の火災予防を呼びかける戸別訪問を通じ地域住民とコミュニケーションを図る。この2点の相乗効果によって経験不足を解消し地域防災能力の向上に取り組みます。ただし担い手不足の解消は一筋縄ではいきません。消防団は地域にとって必要不可欠な組織として認識されていることは間違いありませんが、誰かがやってくれるだろうという思いがあることも事実です。自分たちが親しむ地域を自分たちの手で守るという意識改革を、担い手である若い世代に伝えることが重要です。SNSを有効利用し消防団を魅力ある組織として認識されるように取り組みたいと思います。

離島の防災は複合する要因により困難な場面に遭遇することが多々あります。引き続き地域防災の要となる消防団として、持続可能な組織運営を目指し邁進してまいります。